

高校地理教育における狩猟採集民アイヌ

遠藤 匡俊*

(1997年6月5日受理)

I. はじめに

近年の歴史教育においては、教科書の蝦夷地に関する記述が充実しつつあるという(滝川, 1996; 幡本, 1996)。中学社会科(歴史)および高校日本史の教科書には、和人が蝦夷地へ進出してアイヌを政治的に支配したこと、そして、アイヌの社会と固有の文化は衰退したことなどが記されている。一方で、高校地理の教科書では、わずかに単一民族国家である日本の少数民族として、あるいは、北海道の開拓によって土地を奪われた人びとなどとして簡単に述べられているにすぎない。民族学習領域で取り上げられる民族(新堀, 1997)の中にも、アイヌはほとんどみられない。

しかし、アイヌ文化を積極的に再評価し、とくにアイヌの自然観を歴史教育や環境教育に導入しようとする試みもあらわれている(宮崎, 1996)。本稿では、固有の文化を失いつつある被害者あるいは被支配者としてのアイヌではなく、環境変化に対応する知恵をもっていた狩猟採集民としてのアイヌを、地理学という分野から紹介する。

II. 高校地理の目標

『高等学校学習指導要領』(文部省, 1989)によれば、地理Aの目標は、「世界の人々の生活・文化に関する地域的特色と共通の課題を理解させ、世界を大小様々な地域的まとまりから考察させることによって、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う」ことである。同じく、地理Bの目標は、「世界の人々の生活・文化に関する地域的特色とその動向を、自然環境及び社会環境と関連付けて理解させ、世界と日本を比較し多面的に考察させることによって、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う」ことである。すなわち、地理Aと地理Bに共通する目標は、「世界の人々の生活・文化に関する地域的特色を理解させ、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う」ことと、まとめられる。

しかし、世界の人々の生活・文化に関する地域的特色を理解させる上で、アイヌを含む世界の狩猟採集社会については、あまり取り上げられていない。地理学にとって、狩猟採集社会はあまり意味のない対象なのであろうか。

* 岩手大学教育学部地理学研究室

Ⅲ. 狩猟採集社会とアイヌ

1. 狩猟採集社会の地理学的意義

地上に人類が誕生してから今日に至るまでの時間の99%という長期間にわたって、人類は狩猟・採集生活をしてきた (Lee and DeVore, 1968)。農耕や牧畜が始まったのは、人類史の上ではつい最近のことにすぎない。しかも、かつてはほぼ世界中の様々な自然環境の下で狩猟採集生活が営まれてきた (Lee and DeVore, 1968)。このように、時間軸においても、空間軸においても、狩猟採集社会は人類史にとって重要な存在である。ここに、地理学において狩猟採集社会を取り上げる意義があると考えられる。

2. 狩猟採集社会とアイヌ

かつては、ほぼ世界中に分布していた狩猟採集社会は、農耕 (食糧生産革命) が開始されて以来、その居住地域を狭めて、今日では砂漠やサバンナ、寒冷地などの辺境に限られるようになった。サン (San)、ムブティ・ピグミー (Mbuti Pigmie)、ハッザ (Hadza)、イヌイト (Inuit) などの狩猟採集社会では、食糧を狩猟採集活動で取得することのほかに、①遊動生活 (nomadic way of life)、②集団の流動性 (residential mobility)、③純粋な狩猟採集社会 (genuine hunter-gatherers) という特徴が確認されてきた (Lee, 1979; Lee and DeVore, 1968; 田中, 1971; Tanaka, 1978, 1980; Turnbull, 1961, 1965, 1968; Woodburn, 1968a, 1968 b; Damas, 1968)。①遊動生活とは、狩猟採集活動を行いながら季節的に頻繁に移動することである。②集団の流動性とは、集落や家の構成員が頻繁に入れ替わることである。③純粋な狩猟採集社会とは、外界から隔離され、本来の狩猟採集活動を主とする生活が温存されてきた社会である。

しかし、アイヌは、定住性が非常に高く (Decamps, 1925; 羽原, 1937; 高倉, 1940; 足利, 1968; Watanabe, 1968, 1972; アイヌ文化保存対策協議会, 1969; 小林, 1975; 煎本, 1987)、遊動生活はみられない。このため、アイヌを含む定住性の高い漁撈民などは、世界の狩猟採集社会のなかでは例外的なものと位置づけられた (Murdock, 1968)。集団の流動性も、近年になるまでアイヌでは確認されてこなかった。さらに、畿内地方での鯨肥、長崎における清国との交易でのイリコ (煎海鼠)、アワビ (串鮑)、コンブ (昆布) などが蝦夷地から移出され、あるいは山廻り交易によって、蝦夷地はかなり遠隔の外部社会とも経済的なつながりが既にみられた (北海道史編纂委員会, 1970)。蝦夷地の漁業においては、和人が生産過程にまで進出し、アイヌは労働者と化していた (南, 1976; 海保, 1984)。はじめのうちは、アイヌと和人の交易は、一種の朝貢形式の儀式によって進められたが、このような行事が政治的支配・被支配関係を示す政治的な行事へと転化していった (高倉, 1972; 北海道史編纂委員会, 1970; 榎森, 1982; 稲垣, 1985; 菊池, 1988; 川上, 1991; 秋野, 1996)。

このように、アイヌにおいては、これまで遊動生活および集団の流動性は確認されておらず、しかもアイヌ社会は、純粋な狩猟採集社会とは決して言えないものであった。まさに、狩猟採集社会の研究にとっては、アイヌは例外とみなされても仕方のないものであったと考えられる。

3. アイヌをとりあげる理由

- (1) アイヌは狩猟採集社会の特徴を備えている

第1表 世界の狩猟採集民とアイヌの特徴

特徴	世界の狩猟採集民*	アイヌ
(1) 遊動性	○	× → △
(2) 集団の流動性	○	× → ○
(3) 純粋な狩猟採集社会	○ → ×	×

○：特徴が確認される。×：特徴が確認されない。△：○と×の中間。

*サン (San), ムブティ・ピグミー (Mbuti Pygmie), ハッザ (Hadza), イヌイット (Inuit) など。

第2表 主要食物供給源

世界の狩猟採集民	依存度 (%)		
	採集	狩猟	漁撈
サン (Kung Bushman)	70	30	0
ムブティ・ピグミー (Mbuti)	60	30	10
ハッザ (Hadza)	80	20	0
イヌイット (Copper Eskimo)	0	55	45
アイヌ (Ainu)	30	30	40
58の狩猟採集社会の平均値	40	35	25

Lee(1968)により作成。

今日では、世界の狩猟採集社会のなかで、アイヌは決して例外ではないことが判ってきた(第1表)。アイヌの食糧としては、魚類と植物が重要であり、食生活の中心となるものは、漁撈・狩猟・採集活動によって賄われていたものと考えられる(遠藤, 1997)。そして、アイヌは、定住性が非常に高いことで有名であるが、集落間で本拠地を移す事例が確認され、しかも集落の構成員が流動的に変化していたことが確認されている(遠藤, 1985, 1987a, 1987b, 1990a, 1997)。数日~数週間ごとに他の土地へ移動するサン、ムブティ・ピグミー、ハッザ、ヘヤー・インディアンほど遊動性は高くないが、アイヌは、これまで考えられてきたほど定住性は高くない。また、今日では、いずれの狩猟採集社会も他の社会から隔絶した存在ではなく、時間的変化も経験してきたことが示されている(Solway and Lee, 1990)。サンでは、狩猟採集活動のみでなく交易や農耕・牧畜活動を行い、他の社会とのつながりが生じており(Guenther, 1979; Schrire, 1980; Denbow, 1984; Gordon, 1984; Wilmsen, 1989)、ムブティ・ピグミーでも、物々交換や農作業への労働力提供などによる農耕民との共生的関係が数百年前から続いている(Turnbull, 1961, 1965, 1983)。

世界の58の狩猟採集社会を例として、主要食物を採集、狩猟、漁撈のいずれによっているかをみると、概して低緯度地域では採集活動による社会が多く、高緯度に近い地域では狩猟・漁撈活動による社会が多くなる傾向がある(Lee, 1968)。しかし、主要食物の依存度を具体的にみると、これまで注目されてきたサン、ムブティ・ピグミー、ハッザ、イヌイットなどよりは、むしろアイヌのほうが、世界の狩猟採集社会の平均値に近いことがわかる(第2表)。

以上のことから、世界の狩猟採集社会のなかで、アイヌは決して例外ではなく、むしろ狩猟採集社会のことを知る上で適した民族であると考えられる。

(2) 国際交流の場で問われるのは日本のこと

『高等学校学習指導要領』によれば、「世界の人々の生活・文化に関する地域的特色を理解」とともに、「国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う」ことが目標となる。高校地理に、狩猟採集社会を取り入れる場合には、サン、ムブティ・ピグミー、ハッザ、イヌイトなどの知名度の高い狩猟採集社会をよく知ることが、「世界の人々の生活・文化に関する地域的特色を理解」する上で有効である。しかし、国際社会において、日本人が問われるのは、やはり日本のことであり、「国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う」ためには、狩猟採集民アイヌに関する知識も同じように必要とされると考えられる。

4. 環境変化に対応するアイヌの知恵

(1) 家レベルの集団の流動性の原因

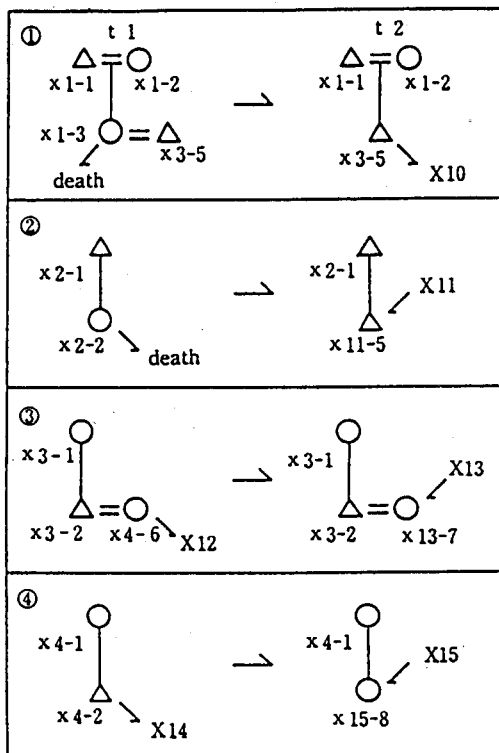
アイヌ社会では、2種類の集団の流動性が確認されている。1つは、家の集落間移動による集落レベルの流動性であり（遠藤, 1985, 1987a, 1987b, 1990a, 1997）、もう1つは、個人の家間移動による家レベルの流動性である（高倉, 1940; 丸瀬布町史編集委員会, 1974; 長谷川, 1987; 遠藤, 1990b, 1994, 1996）。家レベルの流動性の原因として、流行病による死亡、和人との雇用関係による出稼ぎ、和人の強制力がはたらいたことなどがあげられてきた（高倉, 1940; 丸瀬布町史編集委員会, 1974; 長谷川, 1987）。しかし、それぞれの原因によって、いつ、誰が移動したのかは不明のままであった。近年、人別帳を用いた居住者名照合法により、家レベルの流動性が生じるおもな原因として、4つのものが確認されている（遠藤, 1994, 1996）。それは、①配偶者の死、②配偶者以外の死、③離婚、④配偶者以外の離別の4つである。4つの原因による個人の家間移動を示したものが第1図である。第1図の①は、配偶者の死であり、娘（x1-3）の死亡後まもなく寡夫（x3-5）は義理の父母と別れてX10家へ移動した。②は、配偶者以外の死であり、娘（x2-2）の死とほぼ同時にX11家から男性（x11-5）が移動してくる。こうして父親（x2-1）は1人暮らしをまぬがれたことになる。③は、離婚であり、息子夫婦の離婚により妻（x4-6）はX12家へ移動し、息子（x3-2）は新たな妻（x13-7）を迎えた。④は、配偶者以外の離別であり、息子（x4-2）がX14家へ移動するのとほぼ同時にX15家から女性（x15-8）が移動してくる。こうして母親（x4-1）は1人暮らしをまぬがれたことになる（遠藤, 1996）。

(2) 対処流動（Coping Mobility）

天保5～明治4（1834～1871）年頃の高島場所では、和人の定住者がかなりみられ、アイヌは年間をとうしてニシン（鱈）やサケ（鮭）の加工作業や山仕事などの労働力を和人へ提供し、わずかな休暇しか与えられなかった（長谷川, 1981, 1987）。アイヌの人口減少は非常に激しく、個人の家間移動が頻繁に生じ、家構成員は流動的に変化していた。流動性のおもな原因は、①配偶者の死や②配偶者以外の死などのように人の死であった。和人の進出に伴い、従来のアイヌの狩猟採集生活が大きく変化し、人口減少が激しく生じる場合に、家レベルの流動性によって新たな家族を生み出して、家族本来の機能をまっとうし、絶滅を防ぐものと考えられる。

このように、高死亡率による急激な人口減少をもたらすような環境変化がすでに生じて、その環境変化に対処すべく生じた流動性を対処流動とする（遠藤, 1996, 1997）。

(3) 予備流動（Preparative Mobility）



第1図 4つの原因による家間移動

△：男，○：女

X10, X11などは家, x1-2, x3-2などは個人を示す。

遠藤（1996）による。

嘉永1～安政5（1848～1858）年の根室アイヌでは、人口減少期のみでなく人口増加期をも含んでいる。人口100人当たりで10年間に生じる家間移動者数を地域間で比較すると、根室アイヌは最も多く、家構成員は流動的に変化していた。集落によって人口変化の傾向は異なるにもかかわらず、すべての集落において、流動性の最大の原因は、離婚であった。すべてが一夫一婦制であり、離婚当事者の旧夫、旧妻ともその約65%が離婚とほぼ同時に再婚していた。離婚率を地域間で比較すると、根室アイヌで最も高い値を示す。配偶者を変えることは、多様な形質の子孫をもうけるだけでなく、近い親族が増えることによる相互扶助が期待され、将来の環境変化に備える上で有効であると考えられる。

このように、高離婚率と再婚により多様な個体を生み出し、将来の環境変化にあらかじめ備えるべく生じた流動性を予備流動とする（遠藤，1996，1997）。

IV. 高校地理と狩猟採集民アイヌ

狩猟採集民アイヌが、高校地理にどのようなかたちで位置付けることができるかを、『高等学校学習指導要領』による地理Aと地理Bの内容に即してまとめる。

1. 地理Aとアイヌ

『高等学校学習指導要領』による地理Aの内容は、

- (1)現代世界と地域
- (2)世界の人々の生活・文化と交流
- (3)現代世界の課題と国際協力

の3つに細分される。このうち、(2)世界の人々の生活・文化と交流は、「自然環境及び社会環境の多様性を背景に、世界の諸民族の生活の特色を理解させ、異なる地域に生きる人々が交流を深める際の課題などについて考察させる」という内容となっている。この(2)世界の人々の生活・文化と交流の内容は、さらに

- ア. 自然環境と人間生活
- イ. 諸民族の生活・文化と地域性
- ウ. 諸地域の人々の交流と日本の課題

の3つに細分される。このうち、イ. 諸民族の生活・文化と地域性は、「世界の諸民族の生活・文化を地域の自然環境及び社会環境と関連付けて理解させ、地域によって異なる人々の生活・文化を理解することの意義について考察させる」という内容となっている。この部分に、世界の狩猟採集民およびアイヌが位置付けることができると考えられる。

2. 地理 B とアイヌ

同様にして、『高等学校学習指導要領』による地理 B の内容は、

- (1)現代と地域
- (2)人間と環境
- (3)生活と産業
- (4)世界と日本

の4つに細分される。このうち、(2)人間と環境は、「世界の人種・民族及び人間の生活・文化の特色を国家とも関連付けて理解させるとともに、人間を取り巻く環境の多様性についても理解させ、人間と自然との関係や環境問題について考察させる」という内容となっている。この(2)人間と環境の内容は、さらに

- ア. 人種・民族と国家
- イ. 世界の人口問題
- ウ. 自然環境の地域性
- エ. 人間生活と環境
- オ. 世界の環境問題

の5つに細分される。このうち、ア. 人種・民族と国家は、「世界に居住する人種・民族の地域的特色を理解させ、人種・民族と国家との関係などについて考察させる」という内容であり、イ. 世界の人口問題は、「世界の人口の分布や動態を地球的視野から理解させるとともに、人口問題の現れ方は地域によって異なっていることを理解させ、その解決への取組について考察させる」という内容であり、エ. 人間生活と環境は、「生活様式や生産様式、集落の立地など人間の諸活動を自然環境及び社会環境と関連付けて理解させ、人間と自然との関係の変容について考察させる」という内容である。これらの部分に、世界の狩猟採集民およびアイヌを位置付けることができると考えられる。

V. おわりに

アイヌは、これまで、狩猟採集社会のなかでは例外とみなされ、固有の文化を失いつつある被支配者あるいは被害者として紹介されることが多かった。本稿では、アイヌは世界の狩猟採集社会のなかで決して例外ではなく、環境変化に対応する知恵をもつ狩猟採集社会であったことを紹介した。世界の有名な狩猟採集社会と同じように、アイヌが地理教育で取り上げられることが望まれる。

本研究においては、平成8年度岩手大学教育研究学内特別経費（高校地歴科・公民科の総合的研究）を用いた。

文 献

- アイヌ文化保存対策協議会（1969）：『アイヌ民族誌』。第一法規，800p。
- 秋野茂樹（1996）：ラムシャの一考察。アイヌ民族博物館研究報告，5，39-55。
- 足利健亮（1968）：東蝦夷地における和人と蝦夷の居住地移動。人文地理，20，33-65。
- 稲垣令子（1985）：近世蝦夷地における儀礼支配の特質——ウイマム・オムシャの変遷を通して——。民衆史研究会編『民衆生活と信仰・思想』。雄山閣，111-130。
- 煎本 孝（1987）：沙流川流域アイヌに関する歴史的資料の文化人類学的分析：C. 1300-1867年。北方文化研究，18，1-218。
- 榎森 進（1982）：『北海道近世史の研究——幕藩体制と蝦夷地——』。北海道出版企画センター，492p。
- 遠藤匡俊（1985）：アイヌの移動と居住集団——江戸末期の東蝦夷地を例に——。地理学評論，58A，771-788。
- 遠藤匡俊（1987a）：江戸末期の三石アイヌにおける流動的集団の形成メカニズム。地理学評論，60A，287-300。
- 遠藤匡俊（1987b）：アイヌの移動形態を復元する方法について——地図と地名を用いて——。地図，25(4)，18-24。
- 遠藤匡俊（1990a）：三石アイヌの集落と集落群，1856～69年——流動的集団の形成——。地学雑誌，99(1)，98-103。
- 遠藤匡俊（1990b）：紋別アイヌの家構成員の流動性。地理学評論，63A，221-236。
- 遠藤匡俊（1994）：人口減少期の高島アイヌにおける家構成員の流動性のメカニズム——天保5（1834）～明治4（1871）年——。地理学評論，67A，79-100。
- 遠藤匡俊（1996）：根室アイヌにおける家構成員の流動性のメカニズム——対処流動と予備流動——。地学雑誌，105（5），590-612。
- 遠藤匡俊（1997）：『アイヌと狩猟採集社会——集団の流動性に関する地理学的研究——』。大明堂，203p。
- 海保嶺夫（1984）：『近世蝦夷地成立史の研究』。三一書房，359p。
- 川上 淳（1991）：『加賀家文書』からみたネモロ（根室）場所。根室市博物館開設準備室紀要，5，53-73。

- 菊池勇夫 (1988) : 場所年中行事とアイヌ——「ネモロ年中行事の分析」——。研究年報 (宮城学院女子大学基督教文化研究所), 21, 73-108。
- 小林和夫 (1975) : 安政3年の蝦夷地におけるコタンの分布。北方文化研究, 9, 93-127。
- 高倉新一郎 (1940) : アイヌ部落の変遷。社会学, 7, 130-163。
- 滝川裕治 (1996) : 中学校社会科 (歴史) 教科書における北方史の記述。北海道・東北史研究会 札幌シンポジウム 配布資料, 25-33。
- 田中二郎 (1971) : 『ブッシュマン』。思索社, 144p。
- 新堀 毅 (1997) : 民族の見方・考え方。地理, 42(4), 124-129。
- 長谷川伸三 (1981) : 幕末期西蝦夷地における場所経営の特質——西川家高島場所の事例——。地方史研究協議会編 : 『蝦夷地・北海道——歴史と生活——』。雄山閣, 57-87。
- 長谷川伸三 (1987) : 幕末期西蝦夷地高島場所における現地労働力の存在形態。商学討究, 37(1・2・3) (合併号), 57-80。
- 羽田野正隆 (1981) : 十勝平野におけるアイヌ集落の立地と人口の変遷——江戸時代後期を中心に——。北方文化研究, 14, 173-198。
- 幡本将典 (1996) : 日本史教科書の近世北方史記述について。北海道・東北史研究会 札幌シンポジウム 配布資料, 34-42。
- 羽原又吉 (1937) : アイヌの社会経済生活——主として漁獵生活よりの考察—— (二)。歴史学研究, 7, 779-832。
- 北海道史編纂委員会 (1970) : 『新北海道史 第2巻』。北海道, 902p。
- 丸瀬布町史編集委員会 (1974) : 『丸瀬布町史 上巻』。丸瀬布町役場, 768p。
- 南 鉄蔵 (1976) : 『改訂 北海道総合経済史』。図書刊行会, 492p。
- 宮崎正勝 (1996) : 歴史教育における環境主題導入の試み——アイヌの自然観と縄文文化の再評価——。環境教育, 6(1), 16-26。
- 文部省 (1989) : 『高等学校学習指導要領』。大蔵省印刷局, 225p。
- Damas, D. (1968) : The diversity of Eskimo societies. In Lee R. B. and DeVore, I. eds. : *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, pp. 111-117.
- Decamps, P. (1925) : La Repartition de la population chez les pecheurs cotiers, *La géographie*, 44, 129-138. (Decamps, P. 著, 小牧実繁訳 (1933) : 沿岸漁撈民間に於ける人口の分布。地球, 19(4), 43-55.)
- Denbow, M. (1984) : Prehistoric herders and foragers of the Kalahari : the evidence for 1500 years of interaction. In Schrire, C. ed. : *Past and present in hunter-gatherer studies*. Academic Press, London, pp. 175-193.
- Gordon, R. J. (1984) : The !Kung in the Kalahari exchange : An ethnohistorical perspective. In Schrire, C. ed. : *Past and present in hunter-gatherer studies*. Academic Press, Orland, pp. 195-224.
- Guenther, M. G. (1979) : *The farm Bushmen of Ghanzi district, Botswana*. Hochschul Verlag, Stuttgart.
- Lee, R. B. (1979) : *The !Kung San : Men, women, and work in a foraging society*. Cambridge University Press, Cambridge, 526p.
- Lee, R. B. and DeVore, I. (1968) : *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, 415 p.
- Murdock, G. P. (1968) : The current status of the world's hunting and gathering peoples. In

- Lee R. B. and DeVore, I. eds.: *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, pp. 13-20.
- Schrire, C. (1980): An enquiry into evolutionary status and apparent identity of San hunter-gatherers. *Human Ecology*, **8**, 9-32.
- Solway, J. S. and Lee, R. B. (1990): Foragers, genuine or spurious?: situating the Kalahari San in history. *Current Anthropology*, **31**, 109-146.
- Tanaka, J. (1978): A study of the comparative ecology of African gatherer-hunter with special reference to San (Bushman-speaking people) and Pygmies. *Senri Ethnological Studies*, **1**, 189-212.
- Tanaka, J. (1980): *The San, hunter-gatherers of the Kalahari*. University of Tokyo Press, Tokyo, 232p.
- Turnbull, C. (1961): *The forest people*. Simon and Schuster, New York, 295p.
- Turnbull, C. (1965): The Mbuti Pygmies: an ethnographic survey. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, **50**(3), 139-282.
- Turnbull, C. (1968): The importance of flux in two hunting societies. In Lee R. B. and DeVore, I. eds.: *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, pp. 132-137.
- Turnbull, C. (1983): *The Mbuti Pygmies: Change and adaptation*. Holt, Rinehart and Winston, New York, 161p.
- Watanabe, H. (1968): Subsistence and ecology of northern food gatherers with special reference to the Ainu. In Lee R. B. and DeVore, I. eds.: *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, pp. 69-77.
- Watanabe, H. (1972): *The Ainu ecosystem, environment and group structure*. University of Tokyo Press, Tokyo, 170p.
- Wilmsen, E. N. (1989): *Land filled with flies: A political economy of the Kalahari*. University of Chicago Press, Chicago, 402p.
- Woodburn, J. (1968a): Stability and flexibility in Hadza residential groupings. In Lee R. B. and DeVore, I. eds.: *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, pp. 103-110.
- Woodburn, J. (1968b): An introduction to Hadza ecology. In Lee R. B. and DeVore, I. eds.: *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, pp. 193-206.